

青少年の森は守られた サッカースタジアム計画は白紙撤回

県営青少年の森公園の自然豊かな森を5haも切り倒して、サッカースタジアムにする計画は、11月28日白紙撤回すると末松市長が発表。昨年夏から、多くの市民の反対の声を聞くことなく強引に進めてきた計画は、ついに1本の木も切ることなく中止となりました。



青少年の森の「サッカー場予定地」に高橋議員と立つ

ズサンで無責任な計画を追及、撤回を求め続けて

共産党鈴鹿市議団は、この計画が明らかとなった21年8月から「青少年の森を愛する会」に集まった市民の反対運動とともに、市議会で末松市長に撤回を求めてきました。私は昨年9月議会から5回つづけて一般質問で、その計画のズサンな内容と、50年の歴史をもつ立派な公園の中心部を壊すことの不当性を訴えてきました。

サッカーチーム運営会社アンリミテッドの出してきた建設計画・運営計画・資金計画は、どれもいい加減なものでした。建設工事費8億円は「全額借入」で返済計画は無し！これだけでも胡散臭いし、スタジアムは様々なイベントに使用、災害時には避難所に、など思いつきで実効性の無い言葉が羅列されているばかりで、私は最初から「こんなもの出来るはずが無い」と思いました。同時に「ムりに進めて途中で行き詰まったら、誰が尻を拭くのか？」調べていくと、用地所有者である県から鈴鹿市が5ha無料で借りるが、「原状回復は市の責任で行う」仕組みになっていたのです。末松市長が「市は応援するだけ、カネは1円も出さない」と言っていたのは、大間違いでした。

市民の運動が、最悪の事態を防いだ

22年5月、急に事業者がスタジアム予定地をぐるりと囲むフェンスの工事を始めました。これに驚いた市民からは「もう工事が始まってしまうのか？」「頑張って反対していてもダメなのか？」の声が上がりました。このフェンスは業者が『やってる感』を出すために立てただけで、工事木木の伐採もできませんでした。

市民の皆さんがあきらめずに現地での抗議行動を続け、また裁判所に提訴し、そして議会でも追及してきたことが、事業者側に工事着工をさせなかった。11月末に事業者が、自らの内部トラブルなどでJ3参入の見通しも無くなり「自滅」したのは、私たちの見立てがズバリ当たったと言えますが、公園を荒らすことなく「無傷で」終わらせることが出来たのは、大きな成果だったと思います。

一方この2年間、事業者のズサンで無責任な計画に追随し、市民の声を聞くことなく推進しようとした末松市長は、12月議会での私の質問に答弁にも立たず沈黙、いまだに反省の態度を見せていません。その責任を、引き続き問うていきたいと思えます。

来年の市議選、定数4削減され28に

今年の6月議会で「議員定数及び報酬検証特別委員会」の設置が決まり、各会派から8人の委員を選出し（共産党からは石田）、11月まで6回の委員会で議論を重ねました。近隣の市や人口同規模の全国の市との比較など、多面的な議論を行い、その結論として「4人減員」とする会派の意見が多数となって、次回の改選時から「定数28」と決定しました。

議論の中で私は「現在の定数32にした1998年の鈴鹿市の人口は18万6千人で、その後20万人に増えた。いま減少局面とはいっても急激なものではなく、当面は『現行定数を維持』して、多様になった議会活動の質を上げてことが大切だ」と、意見を出しましたが、削減が多数派となりました。12月議会で条例改正議案が議決され、いよいよ2023年4月の市議選挙に向けての動きが活発になります。

日本共産党は、次期市議選には現職の石田秀三・高橋さつきの再選めざして、2名を予定候補として決定しました。市民の皆さんに、この4年間の実績と政策・公約を示しながら、支持を訴えて頑張ります。

若い皆さん、農村に住みませんか？

鈴鹿市は2021年7月に、農村集落の中にだれでも住宅の建設ができる制度「優良田園住宅制度」を活用するための条例を定めました。

その目的は、「その恵まれた自然環境を生かし、豊かな大地で“身近に農のある暮らし”を様々なニーズに合わせて提供することで、市街化調整区域における住宅の建設を促し、もって市街化調整区域の人口維持を図る」とされています。

これまで農村部は「市街化調整区域」＝市街化を抑制する区域として、街に住んでいる人は家を建てられないとされていたのを規制緩和して、だれでも家を建てられるようになったのです。

当面对象となるのは7地区（天名・合川・久間田・椿・深伊沢・鈴峰・庄内）既存の集落の中・隣接している区域、一戸建専用住宅で敷地面積300㎡以上などの条件付きです。いまだこの集落でも空き地・空き家が増えているので、仲立ちをしてくれる人や仕組みがあれば実現可能です。

市の奨励策、各集落の住民の理解と協力が必要

9月議会で、この新制度の問い合わせや申請の状況を聞きましたが、昨年度は相談が35件、認定は1件。まだまだ制度が広く市民に知られていないようです。これには、市の積極的なPRと、受け入れる側の地域にも協力できる取り組みが必要だと思います。

これまで先祖からの土地を守ってきたという思い、「よそ者」が村に入ってくる違和感、旧来からの村の行事や「出合い」作業をどうするのか、などなど。どこの集落もすでに「次の担い手」がいない、集落の機能が維持できなくなってきたと、問題が表面化しつつあります。

一方あちこちで、都会から農業したこともない若者が飛び込んできた、というような話が聞かれます。都会の暮らしよりも「人間らしく生きたい」と願う若者、自然の中で子育てしたいと願う若夫婦と、村人たちとの出会いの場を、うまく作れないものではないのでしょうか？



近所の道端に立つ「天王さん」の祠

ずいそう



マイペースで前へ進む

3年ぶりに鈴鹿サーキットのレーシングコースを走る「鈴鹿シティマラソン大会」が開かれ、私もいちばん短い2キロジョギングに参加しました。

1998年の第2回大会からだいたい毎年出場していますが、記録など関係なしにのんびりと走るだけです。ずっとコース1周5.6キロの部に出てましたが、コロナで「オンライン」開催となった一昨年からは、青少年の森の1周2キロをのべ3回走って「合計5.6キロ超えたら完走」と見做されたのを機に、ムリして走ることより「持続可能な」2キロ走を続けることにしたのです。この日も子どもに追い抜かれるほどのスローペースで、ゴールしました。



スタート前のコース上で

ゆっくりでも歩いて行けば、やがて頂上に着く

この言葉は、山登りの先輩・故伊藤純雄さんがよく言っていました。90才を超えても山を愛して登り続けていた伊藤さん、「急がんでも歩いていたら、しまいには頂上に着くわさ。」四季の風景や山野草を愛でながら歩き、鈴鹿年金者組合のサークル山歩会のリーダーとして、あちこちの山を案内してもらい、私も山好きになりました。

12月初旬に近くの山に久しぶりに行きましたが、1カ月ほど運動不足の状態だったので、大汗かいて息を切らして山道を登りました。こういう時は気分爽快にはならず、日頃のトレーニングをサボるとあかんなあと、反省しきりです。こんな体調の時は、頭も回らず仕事も進みません。「平生往生」という言葉のとおりです。

今年、私は「議員在職35年」の表彰を受けました。有難いことですが、実感がわきません。多少は市民の皆さんのお役に立てたかとは思いますが、いまだ道半ばという感じです。こんな私ですが、来年もどうぞよろしく願います。皆さん、良いお年をお迎え下さい。